

岐阜赤十字病院救護班第一班 東日本大震災活動報告

岐阜赤十字病院 甲状腺糖尿病内科 石森正敏

平成 23 年 3 月 11 日、14 時 46 分、三陸沖を震源とする最大震度 7、マグニチュード 9.0 の地震が発生。岐阜でも震度 3 を記録し、その時私は外来診療中であったが、一瞬自分にめまいが起きたかと思うような大きな揺れを感じた。16 時 30 分、各救護員は一時帰宅し準備を整えるように伝えられ、17 時 30 分に病院に集合。18 時 30 分被災地に向け出動した。メンバーは私のほかに藤田修平医師、阿部福子看護係長、村瀬 彩看護師、長縄里佳看護師、久松大介薬剤部主任、平松幹雄主事、高橋敬明施設・営繕係長の計 8 人。これに岐阜県支部からの 2 人を含め計 10 人が、救急車 1 台とワゴン車 2 台に分乗した。

東名高速、東北自動車道が通行止めのため、東海北陸自動車道より雪の北陸自動車道を通り抜け、新潟県内より一般道を通って山形、秋田を通過し盛岡赤十字病院へ向かった。途中富山で高山赤十字病院からのメンバーと合流した。

3 月 12 日午前 10 時 30 分。盛岡赤十字病院到着。消防学校内に臨時に設置されたヘリポートでの救護活動を指示され移動。被災地より自衛隊などのヘリコプターで搬送され、盛岡市内の病院に移送する傷病者に対応。その後紫波町周辺の避難所の巡回診療を行った。

18 時 30 分。盛岡赤十字病院に帰院。ミーティングにて高山赤十字とともに 3 月 13 日の陸前高田市への派遣を依頼された。

3 月 13 日、午前 5 時。陸前高田市へ向け出発。停電し信号機のつかない街を抜け現地へ向かう。現地に近づくと周辺は一面瓦礫の山。横転した自動車。原形を留めない住宅。折れ曲がった線路。津波にのまれ何もかもが見渡す限り完全に破壊されていた。その後、ほとんど無傷の高台の新興住宅街を通過。津波の被害の有無が街の明暗をはっきり分けていた。

午前 7 時 30 分、1000 人以上の被災者が避難している陸前高田市立高田第一中学校に到着。前日より高田第一中学校内に救護所を設置し活動していた秋田赤十字病院、福井赤十字病院の救護班と引き継ぎを行った。午前中は全メンバー救護所内で活動。午後からは私と村瀬看護師は中学校内の救護所での診療を担当。藤田医師ら残りのメンバーは各地に点在する避難所の巡回診療へ出発した。救護所での疾患の多くは下痢や便秘、発熱などの急性疾患や被災現場で作業中の外傷など。そのほか不眠を訴えられる方も多く、泣き続ける女性、過換気症候群など、精神的に変調をきたされた方も多かった。また、高血圧や糖尿病、心臓病など慢性疾患で治療を受けていた方の多くが薬を紛失していた。今迄どのような処方されていたかが不明であり、対応には非常に困難を極めた。我々の手持ちの薬剤にも限度があり、また、インスリン治療中や人工透析中の方などもおられ、自衛隊に協力を求めて多くの慢性疾患の方を盛岡赤十字病院や県立大船渡病院へ送迎していただいた。

一方、巡回診療に出発した藤田医師らは公民館やお寺などの 14 か所の避難所を訪問した。彼らが訪れた各地の避難所でも急性疾患への対応とともに、薬を失った多くの被災者の対

応に追われたとのことであった。

現地ではとにかく物資が不足していた。電気は自家発電のある限られたところでしか使用できず、水は不足し水洗トイレの使用もままならない状態であった。特にガソリンなどの燃料が足りず、各地に点在する避難所ではガソリンがないため、病人を移送ができない所もあった。また、携帯電話も圏外表示で使用できず、衛星電話が設置してある高田第一中学校以外では救急車も呼べない状態であった。

現地で被災者のために懸命に働いている市の職員や地元の消防団の方などは皆自分自身も被災者で、親類や同僚などの安否が不明な方も多かった。今後も続く彼らの心労を考えると、一刻も早く多くのボランティアが現地に入り活動する必要性を痛感した。しかし、ライフラインが途絶え、燃料や食糧が不足し、居住空間さえ無い現地に無秩序にボランティアが入っても、かえって混乱を招く可能性が高く、早急に何らかの対策が必要であると思われた。

その夜、我々は高田第一中学校で宿泊。屋外の発電機からの電線を引き込むため窓に隙間が開けられ、極寒の中で一夜を過ごした。時折余震と思われるかなり大きな揺れを感じ、とても熟睡などできる環境ではない。救護所は24時間体制をとるため、後から到着した秋田赤十字の第2班と高山赤十字との3チームで深夜は分担。3月14日は午前3時30分に起床し、我々の担当である午前4時から午前7時まで救護所で診療にあたった。午前8時。我々は前日津波警報が発令されたため、行くことができなかった避難所に向け出発。オートキャンプ場と海に近い公民館で巡回診療を行った後、10時45分、高田第一中学へ帰還。交代予定の福井赤十字の第2班が到着し、11時45分、引き継ぎが終了し帰路へ向かおうとした矢先「津波警報」が発令され待機。12時15分、津波警報が誤報であったと判明し、高田第一中学校を後にして岐阜へと出発した。

我々が現地で活動していたのはほんの数日間だが、被災者の方々はつらい避難所生活がこの先いつまで続くかわからない状態である。被災者の方々は非常に忍耐強く協力し合い避難所内は驚くほど秩序が保たれていたが、そろそろ我慢も限界に近づいていると思われる。被災者の方々は皆家族や知人を失い、家や財産も失い大きな喪失感を抱えている。今後の救護には、被災者の心のケアをいかに行うかが大きな課題となると思われる。また、薬切れによる慢性疾患の悪化や衛生状態の悪化による感染症なども予想され、これらにも対応していく必要が出てくると思われる。

被災地の方々は多くの支援を必要としています。非被災地にいる我々はその時々ニーズに応じた支援を行っていく必要があります。多くの方々が末永く協力をして下さるよう強く希望致します。

最後に、この震災で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、一刻も早く被災者の皆様が幸せな生活が送れるよう願ってやみません。